大東文化大学紀要41号

感情表出表現の諸問題

岩　澤　勝　彦

Problems in Expressive Emotional Expressions in English

Katsuhiko Iwasawa

1．はじめに

Hübler (1998) によれば，感情表現には2つのタイプがある。下記（1)-(3）を参照されたい。

(1)　a. I could burst *with rage*.

　　b. *Damn it!*

(2)　a. It was *maddening*, but he could not get the handle fixed.

　　b. He couldn't get that *damn fucking* handle fixed.

(3)　a. Fix that handle; that's *a serious order*.

　　b. Will you fix that *damn fucking* handle immediately, *bastard!*

(1)-(3）のa文は，感情語彙を用いて，感情を描写・報告している。この場合，感情語彙は，記号論的に言えば象徴（symbol）であり，命題成分の一部を構成する。rage（1 a), maddening (2 a), a serious order(3 a)などの語句によって感情を同定し，それらを説明的に表している。感情語彙を用いるこのような感情表現を，「描写（報告）型」と呼ぶことにしよう。これに対して，b文は，damn（fucking）(1 b)（2 b)（3 b), bastard（3 b）などの表現を用いることによって，話し手の感情を直接的に表出している。ここには，感情を客観的に描写・報告する語句は含まれていない。いわば「非明示的」な感情表現である。このような感情表現を，「表出型」と呼ぶことにする。表出型では，感情は話し手による分析・同定を経ずに，特定の構文や語句によって指標的（indexically）に表出される。話し手の感情が，特定の構文や語句によって合図されていると言ってもよい。(注1)

本稿では，これまでに文献で取り上げられている描写型と表出型の感情表現について，それぞれ，統語論・意味論的にどのような点が問題となりうるのか，また，2つのタイプの感情表現は，どのような共通点と相違点をもっているのか，などの点をひととおり整理しておくことにしたい。(注2)

2．感情表現に関わる統語現象

2．1．描写型感情表現の統語現象

描写型感情表現については，主に，補文の選択と，補文内での特定語句の生起可能性，および，広義の呼応関係などが問題となる。

2．1．1．感情性述語の補文と統語現象

生成文法では，知的・論理学的意味に関わる限りでの統語現象が中心的な関心事となっている。では，これまで感情表現についてまったく言及がなかったのかと言うと，必ずしもそうではない。たとえば，Kiparsky & Kiparsky（1970）には，“emotives”という一節が設けられ，for-to 補文をとる動詞の特徴づけが試みられている。（4）の bother や（5）の regret が，その具体例である。（4）は主格補文に，（5）は目的格補文に for-to 補文をとっている。

（4） It *bothers* me for John to have hallucinations.

（5） I *regret* for you to be in this fix.

bother や regret のように for-to 補文と共起する動詞（述語）は，感情を意味するという共通特徴をもつ。この点を捉えて，Kiparsky & Kiparsky は，これらを「感情性述語（emotivity)」と名づけているのである。そのうちわけは，（6）に示した 3 種類であり，具体的には（7）のような述語のことを指している。

（6） a. 古典的文法でいう感情の動詞

b. Klima（1964）のいう感情的述語（affective predicates）

c. 一般に，補文が表す命題内容に関する主観的評価（知っているとか，真か偽かなどの客観的判断ではなく）を表すすべての述語

（7） a. 主格補文をとる感情性述語：important, instructive, suffice, fascinate, relevant, crazy, odd, sad, bother, alarm, nauseate, exhilarate, defy comment, surpass belief, a tragedy, no laughing matter；improbable, unlikely, a pipedream（= a fantastic idea），nonsense, urgent, vital, etc.

b. 目的格補文をとる感情性述語：deplore, regret, resent ; intend, prefer, reluctant, anxious, willing, eager（注 3）

Kiparsky & Kiparky によれば， for-to 補文は，これら感情性述語とのみ共起する。また，その補文は，意味的には，話し手の主観・感情・評価などが向けられる対象を表す。

選択される補文の時制が不定形でなければならないことを，主節述部の「感情」という意味特徴に言及する形で一般化するのが正しいかどうかは，この補文が示す他の特徴の説明方法と絡んでくる。そこで，感情性述語が示す他の統語的特徴を見ておくことにしよう。

まず，感情性述語は，that 補文をとった場合，その補文中に should を随意的に含むことができ

る。感情性述語でない述語（たとえば，well-known など）の補文では，（8 b）が示すように，この種の should は許されない。（注 4）

（8） a. It is interesting that you *should* have said so.

b. * It's well-known that you *should* have said so.

特に，未来を意味する should は，感情述語の補文の中で省略されて，仮定法現在形となることがある。

（9） a. I'm anxious that he (*should*) be found.

b. It's urgent that he (*should*) be found.

第 2 の特徴として，感情性述語の補文は，at all, so, such などの感嘆を表す程度副詞を含むことができる。

(10) a. It's interesting that he came *at all*.

b. * It's well-known that he came *at all*.

(10b) のような感情性述語でない述部の補文では，これらの語句は許容されない。

第 3 に，感情性述語自体の生起可能性の問題がある。感情性述語は，as 関係代名詞節に生じることができないのである。（注 5）

(11) a. * As is interesting, John is in India.

b. As is well-known, John is in India.

いわゆる感情の should や，at all などの感嘆の程度副詞が，感情性述語の補文に生じるのはなぜであろうか。また，as 節のように，感情語の使用が許されない統語的文脈がなぜ存在するのかも，興味深い問題である。

以上のように，Kiparsky & Kiparsky（1970）では，描写型の感情性述語が取り扱われており，それが，文中の他の特定の要素と統語論的・意味論的関係を結びうる，という事実が指摘されているとまとめることができよう。それらの現象に対する真の説明は，「感情」という意味に基づいて与えることができるものなのか，あるいは，あくまで純粋に統語論的な説明が与えられるものなのか。感情性述語は，統語論の自律性を考えるうえでも，非常に重要な問題を含んでいると言える。

2．1．2．過去分詞の転移形容詞用法の問題

感情動詞に由来する過去分詞が名詞（句）の前位修飾語として用いられた場合，時の解釈に関する広義の呼応関係が問題となる。次の例文を参照されたい。

(12) One can certainly imagine the use of a contrastive sentence in a situation where there is no good reason to assume that the addressee is thinking about this matter at the time the sentence is spoken. Sherlock Homes, for example, might have spent the whole evening in cogitation before exclaiming *The butler did it* to a <u>surprised</u> Watson whose mind was completely

on the book he was reading.

この例文において，下線部の感情語 surprised が表す事態は，動詞 exclaim(ing) の表す事態の結果である。ワトソンは読書に熱中していたのであるから，「執事が犯人だ」とホームズが叫んだときにすでに驚いていたのではなく，ホームズのそのことばを聞いて，その結果，驚いたのである。すなわち，次の（13a）によって表される事態によって（13b）の事態がもたらされたのである。

(13) a. Sherlock Homes exclaimed *The butler did it* to Watson.

b. Watson was *surprised.*

しかし，(12) では，(13a) に相当する文の完結を待たずに，その文を構成する項の一部として，(13b) の述部 surprised が，いわば先走った形で，表現されているのである。

これは，ちょうど，次の日本語の文が示すのと並行的な現象である。

(14) 貴乃花は，今日，痛い星を落とした。

「痛い星」があらかじめあるのではない。星を落としたことが痛いのである。したがって，意味的には，「星を落とした」という表現の完結を待って，「この敗戦は痛い」と続くものである。

このように，文中にある他の動詞の表す事態の結果としてもたらされる感情が，その事態を表現する名詞句の修飾語として現れている同様の例文を挙げておこう。

(15) His notes go not only to friends and associates, but to casual acquaintances and total strangers—like *the* <u>surprised</u> *person who got a warm, calligraphic back pat for lending Bush an umbrella.* [*Reader's Digest* Feb 1992]

(16) They were married before a Presbyterian minister two days later, in Connecticut, in a small obscure village where the name of Armagh meant nothing, *but the fifty dollars Rory gave the* <u>astounded</u> *minister* quite shook the threadbare poor old man and made tears come into his eyes. [Caldwell, T. *Captains and the Kings.*]

(17) She *told her* <u>surprised</u> *husband that she was going to have a baby.*

これらの文で下線を施したのは，感情を表す過去分詞由来の形容詞である。これらの形容詞は，斜字体の部分が表す事態の結果としての状態を表している。(15) では，関係詞節が驚きの原因を表している。背中を軽く叩かれたことが，驚いた原因である。(16) は，Rory が大臣に50ドル与えたことによって，大臣が驚いたのである。「驚いた大臣に与えた」のではない。

これらの例文の感情語は，次の例文に見られるような，転移修飾の形容詞の一種であると見ることができる。

(18) a. He was waving a genial hand.

b. I balanced a thoughtful lump of sugar on the teaspoon.

(18) の斜字体の形容詞は，後続の名詞を修飾する位置にあるが，意味上は，主節の行為と同時的な主語の状態・態度を表している。上で見た感情語は，他の節と同時的ではなく，その結果として生ずる（後続的な）状態・態度を表しているのである。

このように，描写型の感情語は，文中の他の述語の表す事態と，意味上の関連性を結ぶのであるが，そこに見られる一般的原則は，解明されなければならない。

2．2．表出型感情表現の統語現象

描写型に対して，表出型の感情表現では，感情の意味が導かれるメカニズムが中心的な問題となる。英語には，感情語彙を使わずに話し手の感情を伝える文法上のしくみが用意されている。その典型例として，Hübler（1998）は次の6つの構文を取り上げ，文法化理論，認知文法，主観性理論などとの関係に意を払いながら分析を試みている。かっこ内に，伝統的な呼称を示しておく。（注6）

(19) a. He looked *me* in the eyes.（所有の与格）

b. I'll do *you* your master what good I can.（心性的与格）

c. You should *face up to* things, not just pretend that nothing's happening.（拡張形式）

d. Many people *have believed* that the world is flat, but they were wrong.（現在完了）

e. You *do* look nice today!（強調の do）

f. He *got arrested* by the police.（get 受動文）

これらの構文は，ある事態を表現するだけでなく，慣習的に，その事態に対する話し手の感情や心的態度を伝達する。話し手の感情を表出する文法上のしくみは，これ以外にも用意されているのかどうか，また，用意されているとすれば，それらをも含む感情表現は，類としてなんらかの共通特徴をもっているのかどうか。この点を以下で考察しておくことにしたい。

2．2．1．感情のダイクシス

Hübler が扱っていない感情表出のしくみとして，this と that の感情用法が挙げられよう。this と that は，基本的には時空間における位置を示す指示語である。指示語としての this と that に，外界指示や文脈指示の機能があることは，よく知られている。これに加えて，this と that には，話し手の感情を表すための用法があると Lakoff はいう。

この感情用法とも呼ぶべき this と that について，具体例を見ておくことにしよう。まず，感情用法の this は，次のような例文に見られる。

(20) I see there's going to be peace in the mideast. *This* Henry Kissinger really is something!

この例文の Henry Kissinger は，特に限定しなくとも聞き手には誰のことか推論できる人物である。固有名詞に this を冠すことは，通例，不可能であるが，(20) のように，感情を込めて引き合いに出す場合には，適格となるのである。

また，感情の this は，次の例文が示すように，there 構文の焦点の位置や，特定の with 句の中など，通例，不定冠詞しか許されないとされる位置に生じることができる。

(21) There was *this* traveling salesman, and he...

(22)　He kissed her with {*this*, an, * the} unbelievable passion.

つまり，この this は意味的には不定であり，語り口に生々しさ（鮮やかさ）を加える働きをもっている。

同様に，厳密には不定の意味であるとは言えないが，次の（23）の文のように，ある文化の中であまり知られていない人物に this を用いて，生々しさをかもし出すこともできる。Fred Snooks は無名の人なので（23）は適格であるが，Richard Nixon は有名人であるため，この種の this は使えない。

(23)　*This* Fred Snooks turns out to have 24 cats.

(24)　?This Richard Nixon is gonna get his.

Lakoff は，感情用法の this は，外界指示の this との関連を反映しているのかもしれないという。すなわち，近さは生々しい感じをかもし出し，実際の距離の近さは，問題としていることとの何らかの意味での近さと関連があるのではないかというのである。

that にも，this と同様に，話し手の感情を表す用法がある。興味深いことに，指示的用法では全く対照的な this と that は，話し手の感情を表す用法では，互いに類似性を示す。中でも興味深いのは，Lakoff も指摘していることだが，本来，距離が離れていることを示す that が，話し手と聞き手の感情的な近さを確立するために用いられるという事実である。たとえば，自動車修理工の男性が，男性客に向かって，

(25)　a. Check *that* oil?

　　b. *That* left front tire is pretty worn.

などと言ったりする。このことばを女性客に対して用いることは，まず，ないらしい。つまり，この種の that は，男同士で仲間意識をかもしだすために用いられるのである。(25b) の that を your に変えると，まるで，ハイウェイ・パトロールの警官が，運転手に出頭命令書を書くときに言うような突き放した響きになるらしい。

次の例も，同様に，同情を寄せている場合にのみ使われる that の用例である。

(26)　How's *that* throat?

(27)　Soak *that* toe twice a day.

この that は，your の代わりに用いられたものである。your と言うと突き放した感じが出てしまうが，that を用いれば，親しみの情がかもし出される。すなわち，your を用いると，話し手は文の表す構図の外へ締め出されてしまうが，that を用いれば，話し手と聞き手が，that の使用を可能にするなんらかの関係を共有していることが含意されるため，少なくとも聞き手の意識の圏外に出てしまうことはないというわけである。

(28) も同様の例である。

(28)　*That* Henry Kissinger sure knows his way around Hollywood.

この文では，話し手と聞き手が，議論の主題になってる事柄について同じ意見をもっていること

が含意されるという。その証拠に，身長など，そもそも意見の違いが問題にならないような事柄が述べられている場合には，that の使用が許されない。

(29)　* *That* Henry Kissinger is 5 ' 8 " tall.

以上が，感情のダイクシスとしての this と that の特徴である。Lakoff は，この連帯感情を表す this と that の用法は，偶然のものではなく，this と that の基本的用法と関連づけて，さらに言えば，指示的用法のメタファー的な拡張として説明されるべきであると考えている。が，その詳細は不明であるとしている。this と that の感情用法が，指示という概念を介してどのように導き出されるのか，という重要な問題点は，依然として残されているということになる。

2．2．2．倒置による感嘆文

感嘆文も，感情語を用いることなく，驚き，喜び，苦痛，願望など，話し手の強い感情を表出する構文である。例文（30）を参照されたい。

(30)　Boy, is syntax easy!

このような倒置感嘆文は，外見上 Yes-No 疑問文と同一であり，感嘆疑問文と呼ばれることさえある。しかし，N. McCawley（1973）は，（30）を疑問文から区別すべきであるとしており，数々の証拠を挙げている。他方，Huddleston（1993）は，両者は同じ構文であり，意味用法の違いは，間接発話行為の理論によって説明すべきであると主張する。

Huddleston は，上記（30）のような話し手の驚きを表す倒置文は，統語的には「疑問文」であり，意味論的にも「疑問」であるという。その証拠として，この文が，イントネーションの点でも分布の点でも，疑問文と大きく異なるところがないことを挙げる。

(31)　Boy, isn' t syntax easy!

(32)　How easy syntax is!

一見，典型的な感情表現と思われるこの倒置感嘆文が，統語的にはどのように分析されるのか。そして，関連することだが，この構文がどうして「驚き」などの感情の表現に用いられるのか，という点は，いまだに十分な説明が与えられていない未解決の問題である。

2．2．3．間投詞

表出型の感情表現の一つとして，oh, ah, uh, well, why, say, my, boy などの間投詞がある。間投詞に関しては，思いのほか研究が少ないが，間投詞の種類ごとに，話し手のさまざまな感情・態度が合図されることはよく知られている。たとえば，（33）の oh は驚き・落胆，あるいは「気づき」を，（34）の ah は，後続の命題について，よい，意義深いという価値判断を合図するとされる。

(33)　Oh, you' re leaving tomorrow!

(34)　Ah, you' re leaving tomorrow!

もっとも，同じ「ためらい」を表すとされる uh と oh でも，話し手の感情・態度が完全に同じであるわけではない。次の例をみてみよう。

(35)　The FBI arrested ... uh ... Bill Jones.

(36)　The FBI arrested ... oh ... Bill Jones.

(35) の uh は，度忘れした名前を思い出そうとしている場合や，名指しの悪影響を心配して言いよどむ場合に用いられる。これに対して (36) の oh は，話し手が誰の名前を出すか最終決断を下した場合，(36) の例で言えば，逮捕者全員を知っているが，その中から Bill Jones 一人の名を出そうと決断した場合などに用いられる。

(37) と (38) も同様の例である。

(37)　I saw...uh...twelve people at the party.

(38)　I saw...oh...twelve people at the party.

(37) は，正確な人数を知らずに，大体の人数を言う文であり，(38) は，正確な人数を思い出して，確信をもって言う文である。つまり，uh は不確実のための「ためらい」を，oh は，話し手の「確信・決断」を合図するのである。

James (1972) によれば，間投詞を含む文に関しては，これ以外にも，感情が文中のどの命題に対して向けられているかという点が重要である。間投詞を含む文は，文中のどこかに，その感情の原因となった命題を含んでいる。パラフレーズを用いれば，この点を明らかにすることができる。たとえば，上記 (34) で触れた文頭に生じる ah の意味をパラフレーズするなら，I have just discovered that S and it is significant that S. とでもなろう。このパラフレーズで言及されている S が，必ず，文中のどこかに表現されているのである。例文 (34) では S が一つしかなかったが，次の (39) のように，複数の S が含まれている場合には，解釈にあいまい性が生じることがある。実際，(39) の文は，(40a) に示されるような主節の表す事態に驚いたのか，(40b) に示されるような that 節の表す内容に驚いたのか，あいまいである。

(39)　Ah, Newsweek reports that Kissinger is a vegetarian!

(40)　a. ニューズウィークが報告していること

　　b. キッシンジャーが菜食主義者であること

間投詞が表す感情・態度の原因を表す S が，文中のどの位置に生じうるかは，一般的な統語論的制約に従う。したがって，たとえば，次の (41) (42) では，驚いた原因は，(40a) に表される主節の内容のほうである。

(41)　Ah, it is reported by Newsweek that Kissinger is a vegetarian!

(42)　Ah, that Kissinger is a vegetarian is reported by Newsweek!

同様に，同格節，関係節の中にも生じないし，and で結ばれた一方の S でもありえない。

(43)　Ah, Newsweek reports the story that Kissinger is a vegetarian!

(44)　Ah, John bought his car from the man who says that Kissinger is a vegetarian.

(45)　Ah, the sun's shining and there's not much wind.

以上見てきたように，間投詞によって合図される感情の原因となった事態が，文中に表現されており，その分布は一般的な文法的制約に従うという点は非常に興味深い。間投詞は，語彙的に感情を同定するものではないが，先に見た転移形容詞用法の感情語と同様に，原因表現との呼応関係が問題になるのである。

3．表出型感情表現の共通特徴

前節までに見てきた表出型感情表出の構文には，なにか共通点があるだろか。Hübler は，この点について，ひとつ重要な指摘を行っている。まず，意味に見られる共通点として，命題内容が，何らかの点で「著しい，珍しい，注目すべき（remarkable)」内容を含んでいるという特徴がある。また，統語的には，なんらかの余剰な要素を含んでいる。内容の「顕著さ」と余分な要素の存在，この2つの特徴から，聞き手は感情の意味を推論できるようになる，と Hübler は考えている。その推論の過程は，(46a–g) のような連鎖としてまとめることができる。

(46)　a. 文が余剰な要素を含んでいる。

b. その要素は，何かを指示しているはずである。

c. 同義表現との比較から，その指示物は，言語内にはないと考えなければならない。

d. 言語外に，その指示対象を求めてみる。

e. その指示対象は，何らかの点で「顕著である」という条件を満たしている。

f. その指示対象は「顕著である」ため，話し手は感情的に巻き込まれることになる。

g. 結局，問題の余剰要素は，話し手の感情を指し示すと考えられる。

ところで，余剰要素があると，それは，必ず話し手の感情を指し示すようになるのであろうか。通常，単語の意味は，象徴的（symbolically）に合図されるが，文法的しくみの感情的意味は，推論によってのみ推し量られるものであり，いわゆるインデックスの性格を獲得しているものである。では，どのような条件のもとで，ある文法的なしくみがインデックスとして，感情的意味を指し示すようになるのであろうか。その条件を考えてみよう。

まず，前提条件として，代わりの言い方が利用できるということが挙げられる。ただし，その代わりの言い方を選択するによって，命題内容が異なってしまうことは許されない。つまり，自由変異にある代替表現の存在が必要なのである。利用可能な表現に選択の余地がないなら，感情的意味の入り込む余地はないということになる。

興味深いことに，感情表出構文は，対応する構文に比べ，より多くの語を費やさなければならないことが多い。ことばが多いほど意味される内容も豊富である，という一般常識的な考え方に従うならば，感情表出構文には，余剰な意味があるということである。ことばが多く，意味が余剰であること，この2つの特徴が，感情表出構文を「インデックス」的なものにするのに役立っていると Hübler は考えている。意味の余剰を「言語の外部」に求めなければならないために，上

記（46）にまとめた推論によって，結果的に，話し手の感情が指し示されるということになるというわけである。

しかし，感情表現全般を見てみると，いま述べたのとは逆の一般化を示す現象もある。たとえば感嘆文などは，形式的には多様であるが，余剰的な表現を含まず，短い表現になればなるほど，話し手のより強い感情を表出することになっていく。この段階では，文法性というよりも，その破格性をはかる基準が意味をもってくるように思われる。文法的破格による感情表出のしくみは，指示と余剰要素に基づく原理とは異なる原理の存在を示唆するものである。

4．おわりに

本稿では，感情語には，独特の統語論上・意味論上の問題点が散見されるということをみてきた。しかし，感情表現は，感情語彙や統語論的な構文によってのみ行われるのではない。以下にあげるような，形態論レベルのしくみによっても感情を表すことができる。（注７）たとえば，-ie, -kin, -let, -ling などの縮小辞によって愛着を表したり，son of a bitch というような語彙的な比喩表現によって嫌悪感をあらわにしたり，あるいは，What are you jabbering about? のように，中立的な talk(ing) という語ではなく，jabber(ing) という感情を連想させる語を用いたりすることによって，感情を表出することもできる。

形態論的なしくみから統語的な特殊構文にいたるまで，分析しなければならない感情表出表現は多岐にわたっており，数多くの問題が存在している。本稿にまとめた問題点が，より広範に感情表現全般の特徴であるのか，あるいは，ある感情語彙と構文に特殊なものであるのか，その点を見極めるためにも，描写型と表出型それぞれの区別を踏まえて，個々の感情表出表現の特徴をさらに明らかにしていくことが必要である。

注

1：Hübler は，描写報告型の感情表現を「純粋モード（mode pur)」「順応的（adaptive)」，表出型のそれを「体験モード（mode vécu)」「態度表明的（adoptive)」と呼んでいる。

表出型の表現には，感情表出の機能をもつのに，その感情を明示的に描写・説明する語句を用いていないというパラドクスがある。また，描写型と表出型はどちらも発話行為であるが，それぞれが発語行為，発語内行為，発語媒介行為のどれに該当するのか，発話行為論の提唱者 Austin 自身，判断しかねているという。発話行為論の文脈において２つのタイプの感情表現を分析することは，今後の課題としたい。

なお，次の（i)，（ii）のような文は，本文の（２）（３）と同様の意味内容をもつが，通例，感情を表出しているわけではないので，感情表現には含まれないとされる。

(i) He couldn't get the handle fixed.

(ii) Fix that handle!

2：Bühler が提唱し，Jakobson も自説に取り入れている言語の３つの機能ごとに，描写型と表出型の区別を引用しておこう。

まず，訴求・働きかけ機能（appellative/conative）をもつ文については，感情の２つのモードは，次の２文によって例示される。

(i) Stop talking.（描写型）

(ii) Shut up already, will you!（表出型）

働きかけの内容が stop talking ということばで明示的に言及されている（i）に対して，（ii）は話手の感情を直接相手に向けている。

描写・指示機能（representative/referential）をもつ文は，次のような対比を示す。

(iii) It was extremely hot.（描写型）

(iv) It was so hot!（表出型）

描写型である（iii）は報告文の性格を持つが，表出型の（iv）は，発話時点に話し手がもう一度暑さを追体験しているといった意味合いをかもし出す。

表出・感情機能（expressive/emotive）をもつ文についても，同様の対照が見られる。

(v) I am getting mad.（描写型）

(vi) Damn it!（表出型）

描写型の（v）は，話し手の精神状態を mad という感情語彙によって描写し，内的な感覚の報告を行っている。これに対して，表出型の（vi）は，怒りの発露としての表現であるということができる。

感情表現の中には，描写型と表出型の中間的な事例もある。それは，次の例文に見られるような，いわゆるモダリティ表現である。

(vii) He couldn't get the handle fixed, *which was maddening*.

(viii) *Unfortunately*, Irene and Arthur separated.

(ix) *I would really appreciate it, if* you could prepare a preliminary version.

(vii)−(ix) の斜字体部は，機能的には表出的でない発話に，感情的なコメントを付け加えている。このような文は，描写と表出の中間的な事例であると言える。

3：感情性述語（emotives）は，叙実的述語（factive）とは交差分類される。この点には十分な注意が必要である。

4：これは，学校文法でいう「感情の should」のことである。感情の should の例文については，Jespersen（1933）を参照されたい。もちろん，義務の should や未来の should は，感情性述語でない場合も生起可能である。

5：この違いを，対応する日本語によって表すなら，さしずめ，次のような訳が考えられよう。

(i) a. *興味深いように，ジョンはインドにいる。

b. よく知られているように，ジョンはインドにいる。

6：このうち，（19a）の所有の与格（possessive dative）と（19b）の心性的与格（ethical dative）は，現在では生産性を失っており，一部の決まり文句にその名残りをとどめているにすぎない。（19a）の目的語は目的格 me であり，所有代名詞を用いた He looked *my eyes*. などの表現と比べると，目的格代名詞の表す被行為者全体に関心があり，感情的色彩を伴うとされる。そのため，これを利害の与格の中に含める人もいる。また，（19b）の心性的与格とは目的語代名詞 you のことを指している。この目的語代名詞は，話の内容に対して話し手が関心をもっていることを示し，聞き手の関心を引くために動詞のあとに挿入されたものである。

7：Hübler（1998：14）は，語形成レベル，副詞，接辞などによる強調は，一般に，表出的に解釈することはできないと述べている。(It seems, however, that at least the lexematic, adverbial and suffixal means of intensification cannot generally be interpreted as expressive.)

参照文献

Fodor, J. A. and J.J. Katz (eds.) (1964) *The Structure of Language*, Prentice-Hall.

Hübler, Axel (1998) *The Expressivity of Grammar*, Mouton de Gruyter.

Huddleston, Rodney (1993) "On Exclamatory-Inversion Sentences in English," *Lingua* 90, pp.259-269.

James, Deborah (1972) "Some Aspects of the Syntax and Semantics of Interjections," *CLS* 8, pp.162-172.

Jespersen, Otto (1933) *Essentials of English Grammar*, London.

Lakoff, Robin (1974) "Remarks on *This* and *That*," *CLS* 10, pp.345-356.

Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky (1970) "Fact," Steinberg-Jakobovits (eds.), pp.345-69.

Klima, Edward S. (1964) "Negation in English," Fodor and Katz (eds.), pp.246-323.

McCawley, Noriko A. (1973) "Boy! Is Syntax Easy," *CLS* 9, pp.369-377.

Palmer, Gary B. (1999) "Review of *The Expressivity of Grammar: Grammatical Devices Expressing Emotion across Time* by Axel Hübler," *Cognitive Linguistics* 10-2, pp.190-192.

Steinberg, Danny D. and Leon A. Jakobovits (eds.) (1971) *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*, Cambridge University Press.